

おきんこ



高知 三年 こうき

ぼくは、ゆめを見た。ぼくは、空をほうきでとんだ。おちそうになってもとんだ。つめたい風がふいて気持ちがよかった。

その時、

「こら、おきんか。」

と大きな声で、ほったたかかれて、ぼくは目がさめた。目をあけたら、おじいちゃんがベッドのよこに立っていた。おじいちゃんは、「はようおきや。」

と言って、すいじばに行った。

ぼくは、ベッドのよこに立った。その時、ちんこのところがつめたかった。ぼくはパンツを見た。ちんこのところがギザギザにぬれていた。

ぼくは、パンツをぬいだ。たんすから新しいパンツを出してはいた。ぼくは、ぬれたパンツをすいじばに持って行った。

おばあちゃんが、

「またおもらしたかえ。」

と言った。ぼくは、

「ちよっとしかしちゃあせん。」

と言った。ぼくは、はずかしかった。だからおこって言った。

パンツをせんめんじよに持って行って行ってせんたく物のあるところに、パンツをなげた。

(指導 坂田次男)